

一九五三年三月二五日
発行



第35卷 第4号

史学・地理学・考古学

共同研究 **日清戦争** (24)

梅 溪 昇 西 村 陸 男
北 村 敬 直 姜 在 彦

朝鮮石器時代の「すりうす」.....有 光 教 一 (1)

学界動向

最近の一八四八年研究 (フランス)平 田 嘉 三 (64)

資料解説

藤沢市清浄光寺の時衆過去帳.....赤 松 俊 秀 (81)

書評と紹介

太塚武松著「幕末外交史の研究」.....時 野 谷 勝 (84)

藤田五郎著「封建社会の展開過程」.....高 尾 一 彦 (85)

J. Halecki: The Limits and Divisions of
European History.....前 川 貞 次 郎 (88)

二つの文化変動理論.....石 川 栄 吉 (91)

最近の日本考古学の発掘報告書.....小 林 行 雄 他 (98)

東洋史研究会

京都大学文学部東洋史研究室

振替口座京都三二二八号

史 学 研 究 会

京都大学文学部内

本書を通じて、特に注目されるのは、対馬が最初から、北九州と同一文化圏に属していることで、これは各時代を通じて変らない。しかし、このことは南鮮の考古学的知見の乏しい事実からして、なお連断をゆるさない問題ではなからうか。次に、特に青銅利器について顯著に認められるのであるが、外来文化が一旦北九州へ伝えられ、日本化した後この島に逆輸入されている事実が確かめられた。これは文化の伝播の一つの法則を示すものであり、一中心から他の中心に伝わり、その後中心から文化圏の末端に伝えられて行くのである。かくして対馬の単なるステッピング・ストンの性格はよく理解されるであらう。

以上述べた所で明らかな如く、本書は新しい地域調査の試みとして注目すべきものを持つて居る。又、考古学と文献史学とを総合せんとする指向も、従来の考古学の狭さを打破する意味で重要であらう。

ただ、調査団が主として考古学者にのみ限られたことは、前述せるこの島の特殊性から言つて、又、総合的考察の必要から考えて、遺憾とせねばならぬ。関係諸科学の協同こそ

は、より広い見地からする考察を可能とするからである。その意味で、その後行われた九学界協同の調査の成果を期待する。(昭和二年一月、東亞考古学会刊、B5版、本文二四〇頁、英文概要三八頁、図版七一、定価一、八〇〇円)。

以上五冊の報告書を取扱つたが、書評としては例外的に長いものとなつたので、割愛させていただいた報告書もあり、又、最近刊行されたと知りながら、入手が遅れたため、ここに取り上げられなかつたものもあるのを御了承願いたい。ここでは、考古学の年代決定法に翻期的な意義を持つ放射性炭素による測定値が、姥山貝塚の資料によつて、日本では初めて明らかにされたことのみを附言して置く。(日本考古学研究所刊、ジェラード・グロート、篠達喜彦著、「姥山貝塚」参照)

小林行雄、樋口隆康、坪井清足、横山浩一、藤沢長治

執筆者紹介

有光教一	京都大学助教
梅溪昇	京都大学人文科学研究所助手
西村陸男	京都大学助教
北村敬直	大阪市立大学助教
姜在彦	大阪市立大学研究生
平田嘉三	広島大学助手
赤松俊秀	京都大学助教
時野谷勝	広島大学教授
高尾一彦	神戸大学講師
前川貞次郎	京都大学助教
石川栄吉	京都大学助手
小林行雄	大阪大学講師
樋口隆康	京都大学講師
坪井清足	京都大学院学生
横山浩一	京都大学助手
藤沢長治	京都大学院特別研究生

この度改選の結果昭和二八、九年度史学研究会委員は次の通り定まりましたので御通知いたします

理事長 原隨園 理事 赤松俊秀(編集) 佐伯富(庶務)
藤岡謙二郎(會計) 織田武雄 前川貞次郎 監事 小葉田淳
水野清一 評議員 赤松俊秀 井上智勇 梅原末治 織田武雄
小葉田淳 貝塚茂樹 小林行雄 佐伯富 柴田実 田村実造 那
波利貞 奈良本辰也 林屋辰三郎 原隨園 藤岡謙二郎 前川貞
次郎 水野清一 宮崎市定 村田敦之亮 編集委員 池田誠(東
洋史) 石川栄吉(地理) 越智武臣(西洋史) 門脇禎二(國
史) 藤沢長治(考古学) 庶務委員 河地重造 林巳奈夫 三
吉希 會計委員 瀬原義生 末尾至行

史学研究会例会通知

北魏王朝の成立とその性格について……………河地 重造
マライシア島嶼圏における民族移動と
その交通地理学的考察……………別枝 篤彦

五月十九日(土) 陳列館第二教室において

編 集 後 記

新しい編集委員会の発足に当り、新委員の決意は雑誌に何か貫串する企画性をもたしたいということであつた。八ボ二段組の設定はかゝる企画への即応であり、併せて新しい活動領域への翼庶でもあつた。そしていま約一年に亘る史学科共同研究の成果をとまかくも先ずこの欄に飾り、読者諸兄弟の手許に送り得ることに私も委員の一人として細かな喜びを感じる。と同時に史学研究会大会あるいは例会の報告が雑誌と直結したことも続く号へと一つの示唆となれば幸いである。寄稿諸氏への月並な蕪辭は止めよう。われわれが必要とするのは総ゆる角度からの批判と鞭撻であらうからである。尙一言附言したい。企画性は連帯性を伴うということ。そして共同研究における西洋史の欠除にわれわれは重大な責務を感じているということ。(越智)

一九五三年三月二五日 印刷
一九五三年三月二五日 発行 定価 百円

史 林 (第三五巻、四号)

発行所 史 学 研 究 会

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
振替大阪一四五五六番
京都市下京区七条御所ノ内東町三九

印刷所 中村印刷株式会社

THE SHIRIN

or the

JOURNAL OF HISTORY

Vol. XXXV, NO. 4

OCT. 1953

CONTENTS

Article :

Neolithic Querns from Korea..... *K. Arimitsu* (1)

Cooperate Study :

Sino-Japanese War as seen from the Japanese
Viewpoint *N. Umetani* (24)

The Industrial Revolution and the Sino-Japanese
War *M. Nishimura* (35)

Sino-Japanese War as seen from the Chinese
Viewpoint *H. Kitamura* (44)

Sino-Japanese War as seen from the Korean
Viewpoint *Z. E. Kang* (51)

Short Notices :

Recent Studies in the Revolution of 1848(France)
..... *K. Hirata* (64)

The Necrology of the *Jishu* in the Shojokoji
Temple, Fujisawa *T. Akamatsu* (81)

Book Reviews & News

Published

by

THE SHIGAKU KENKYUKAI
(*The Society of Historical Research*)

Kyoto University, Kyoto, Japan